

すばる 1961年10月号

見事な物語行為論事始め

柳敦子『行為としての小説 ナラトロジーを超えて』

現時点での文芸批評の最尖銳部分が日本近代文学の古典的名作ばかりを根本的に読み換えるようという意欲作である。構造主義のナラトロジーを超えて、スピーチ・アク

ト理論を明治から昭和にかけての名作について実証してみようというのが狙いだ。

発話が状況や文脈と切り離して分析でき、その内容は二元論的な真偽という観点からのみ分析可能なものと大なり小なり前に提していた旧式のあらゆる哲学的立場に対して、発話は事であると同時に事を為す、行為するものだと、う主張でジョン・オースティンの原題『言葉で何を行ふか』が華々しくデビューしたのが一九六二年のことだ。それが発話の複雑な関係ででき上り、広く読まれていて、読者が既にある抜き難いイメージを持つてゐる可能性が高い作品『丑』ばかり選んでくるところにも、自らの読みの才力に著者が持つ絶大な自信を見つけて、爽快感わざつた。

はじめの三作は男女間の発話の微妙な機

うちでも言語哲学寄りの批評原論に足をとられて、人物たちの発話が「行為」する現場の分析がおろそかだつたり、付会だつたり、とにかく余り「読ませない」のだ。

柳氏の今回作は物語論一般の「そうした通弊とは無縁である。「物語とはその場を構成する諸要素の絡み合いによって演じられるバフォーマンスである」とくら実に簡

して要を得たスピーチ・アクトの規定をしておいて、ただちに具体的な作品の具体的な部分の精読に移る。この徹底した具体主義もさうだし、そやつて選ばれる作品が

明治末年に既に関係における男女の転倒まで書いた漱石や鷗外の異貌が浮上してくる。発話行為論やジョン・オースティンの「なともに自ら誕生したポップ世代の「なにげな」手書きがあくまで軽やかだ。

とにかく面白い。その時点で人物たちの持ちうる知識を推定しながらどうしてだれのこの台詞が出てくるかと断していく手付きはほんとど推理小説の感さえある。こうして『雁』はボストモダンの「驚嘆すべき物語」として浮上するわけだが、四篇どれもそれぞれに「驚嘆」しつつ味読した。作中の人と発話の関係に対する柳氏の強烈かつとぎれぬ関心に一番「驚嘆」するのであり、批評の本場で培われたサービス精神とゼロからの徹底した説得力には、もう一度言うが近時稀な知的爽快をおぼえた。

高山宏

